

## 早期、内蒙古喀喇沁右旗における日本語学校\*

高山 乾 忠\*\*・布日其格\*\*\*

Early stage and Japanese-School education in Kalaqin Right Banner Inner Mongolia

Ken chu Takayama\*\*

Qiqige Buri\*\*\*

### 目次

#### 要旨

- I. はじめに
- II. 喀喇沁右旗の学堂教育
  - 一. 初期学堂の教育制度
  - 二. 貢桑諾爾布と革新政策
  - 三. 崇正、守正武両学堂
- III. 毓正女学堂
  - 一. 学堂創設
  - 二. 生徒募集
  - 三. 学則及び授業状況
- IV. 毓正女学堂の教師—河原操子
  - 一. 毓正女学堂に就任前の河原操子
  - 二. 毓正女学堂外の活躍
  - 三. 河原操子による日本留学
  - 四. 河原操子の後を継いだ日本人教師
- V. おわりに

#### 要旨

近代では、女学堂は女子教育を行う主な場として、早くも1897(光緒28)年4月に上海で最初の経正女学堂が創立された。それを引継ぎ、中国各地で相次いで多数の女学堂が創設された。内蒙古地区で初めて創立された女学堂は毓正女学堂である。その創立は、何百年も引き継がれてきた「女子の無才は徳なり」という封建思想を打ち破り、女子にも知識と教養を身につけさせれば、次第に女性の社会地位も高まることが提唱された。だから、毓正女学堂は内蒙古近代女子教育事業の発展において、計り知れない役割を果たしたのである。

本論文は、毓正女学堂が創られた全過程の論述を通して、貢桑諾爾布がこの女学堂を創立した歴史意義を論証する。また、この女学堂で教育を行っ

た日本人女性—河原操子の生涯を分析して、さらに彼女が日本語教育活動を通して、近代内蒙古女子教育上に果たした貢献を明らかにする。したがって、彼女の身分についての争論にも触れて、筆者は自分なりの見方を取り上げてみたい。

また、当時の文史資料、地方志、雑誌、自伝に基づき、三つの面から分析と論証を進めた。第一では、学堂教育実施まえの教育実態及び貢桑諾爾布の革新政策により創られた崇正学堂と守正武学堂の創立経緯を分析し、貢桑諾爾布が内蒙古近代教育史上の先駆者であることを論証する。第二では、主に毓正女学堂が創設された目的、経緯及びその特色を生徒募集、学則及び授業状況の具体的な分析を通して、その歴史意義を明らかにする。第三では、主に河原操子の人物像を描写し、内蒙古近代女子教育上の働きを彼女の生立ち、毓正女学内外での活動及び三名の蒙古女子生徒を日本に留学させた事跡の論述を通して、彼女の内蒙古近代女子教育事業に尽力した実績を明らかにする。最後に、結論としては、貢桑諾爾布が内蒙古地区で近代教育制度を取り入れた先駆者として、民族の振興が教育にあると確信した先覚思想のもとで学堂を創立した。其の中の毓正女学堂の創建は近代内蒙古女子教育史上で画期的な意義を持っている。この女学堂で教育を行うと同時に地元の民衆には多大なる有益をもたらした日本人女教師——河原操子の近代内蒙古女子教育上の貢献が忘れられないであろう。

#### I. はじめに

日清戦争は、大清国の敗北で終わり、「東夷の小国」である日本に打ち破られたことは、日本を自国の臣国と扱ってきた大清国を驚かせたのである。このため、民族の振興、国家の近代化を図る。

\* Received January 21, 2010

\*\* 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 国際交流学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

\*\*\* 内蒙古民族計算機専修学院非常勤講師

政体維新運動が全国各地に広まり始めた。目立たない小国である日本が教育振興により短期間で強大になった事実及び西洋の宣教師により創立された学堂が現れたことが民間知識者らに教育の重要性を再認識させた。この時期より、隣国の日本から近代化技術・知識を学ぶ風潮が引き起こされ、各地に学堂創設が始まった。

このような学堂づくりの風潮に伴い、反封建、男女平等を唱えた新知識女性の養成を目的とした女学堂も創立され始めた。1897（光緒23）年4月頃に中国近代資本主義思想家・教育家である経元善氏により上海で創立された経正女学堂を引継ぎ、杭州で貞文女子学堂、湖南で淑慎女学など上海、天津、寧波の三つの地域を中心とした女子制度の学堂が開かれ、内陸部における女学堂づくりのモデル校になった。

この女学風潮の中におかれた内蒙古地域では、1903年に喀喇沁右旗郡王である貢桑諾爾布は自らの主導で、また日本人女教師の河原操子の協力によって喀喇沁右旗王府で毓正女学堂を創設した。毓正女学堂が内蒙古地方で初めて創設された女学校として、その目的及び歴史的背景はなんであったのか。河原操子の毓正女学堂での活動は蒙古族女子教育にどのような影響を与えたのかについて、筆者は歴史文献、地方志、本論文に関与する人物の自叙伝及び先行者の方々の研究結果の学術論文などに基づき、さらに、日本にある書籍を補って、主として下記の幾つかの観点を挙げて見た。

- ①. 毓正女学堂の創始者である貢桑諾爾布の人間像についての研究が多い。  
貢桑諾爾布が喀喇沁右旗郡王の位についた後、旗民の豊かさ及び民族の発展を図り、経済、教育、文化にわたる広範囲での改革を実施した。これらの改革措置は成功を挙げたため、貢桑諾爾布の人物像が内蒙古のモンゴル人の中で高く評価されている。それらの研究著書の中で、毓正女学堂が彼の業績の一つの象徴として度々取り上げられている。
- ②. 毓正女学堂の歴史意義についての見解。  
毓正女学堂が内蒙古地域において、最初の女学堂であるにも関わらず、日本の女学校を模倣し、日本人教師が携わったため、日本人の根拠地でもあったのではなかろうか。
- ③. 毓正女学堂における河原操子への評価。  
毓正女学堂の創設において、中堅の役割を担った河原操子が近代内蒙古女子教育の種

を蒔いたことである。

- ④. 横田素子さんは毓正女学堂の創設については、彼女の論文<sup>1</sup>で「勸業博に照準を合わせ貢桑諾爾布の渡日を画策したであろうことは疑いようがない」と書いてあり、毓正女学堂が創設された全過程は日本側の予め画策したとおりに進行したと見なしている。
- ⑤. 山崎朋子さんは「毓正女学堂には、日本の女学校の分校ではないか」<sup>2</sup>という論点を取り上げ、女学堂の日本語教授時間割り、祝祭日の休み、女生徒らに日本軍の慰問に充てる編物を編ませたなどの方面からこの論点を論証している。
- ⑥. 教育界では、河原操子の決断と行動は日本女性の雄姿として、当時教育雑誌にしばしば報道され、若い日本女性たちの憧れの対象となったとされている。

上述の内容と、他の関係内容を合わせて分析すると、毓正女学堂が内蒙古を日本化する為の日本の根拠地であるという観点がもてる。

以上の論点をめぐって、筆者は本論文では先行者の研究結果をまとめたうえで、三点から論述を展開して、自分なりの観点を論証する。第一では、貢桑諾爾布の人物像の描写及び彼の諸革新政策の実施経緯を述べて、毓正女学堂が創設される直前の喀喇沁の教育背景を考察する。第二では、毓正女学堂が貢桑諾爾布の諸革新政策の一環として創立されたが、その目的、経緯及び特徴を述べて、さらに毓正女学堂が近代知識女性を排出した画期的な歴史意義を持つ学校であったことを論証する。第三では、毓正女学堂における河原操子の生い立ちから喀喇沁での各活動、教育実践を分析して、彼女が近代蒙古族女子教育事業に貢献したことを明らかにする。

## II. 喀喇沁右旗の学堂教育

### 一. 初期学堂の教育制度

清朝年間、清政府統治下の中国では教育体制及び形式は主として官営の八旗教育と漢地庁学であった。其の外、西洋の教会勢力により開設された学校も少数あったが、もっとも長期存続してきたのは塾だった。1902（光緒28）年8月に清政府が各州県に学堂建設の令を発した後、全国各地で学堂づくりの風潮が引き起こされ、この風潮は早くも万里の長城沿いにある内蒙古の盟や旗にも広まった。内蒙古喀喇沁右旗で学堂が創立され始めたのは1902（光緒28）年10月であった。

喀喇沁右旗において、家塾の開設は清朝乾隆年間に遡る。旗扎萨克多羅杜棱<sup>3</sup>郡王がもつばら王室子弟及び貴族子女らのみを養成するために、王府内に家塾を設けたのである。家塾では漢文・蒙古文・チベット文・満文を教授するほか、応用文書・礼儀・計算・書道・詩詞なども教えられていた。後になってくると、王室子弟のみではなく、王府の官吏らも子女たちに教育を受けさせるために官邸の中で勉強する場を設け、家庭教師を招聘し教育を行う。これを貴族の私学と称し、のちの私塾であった。

このような家塾の繁栄に伴い、喀喇沁右旗の蒙古族居住の地方に土地開墾の拡大や大勢の漢民族の流入により、大面積の草原の開墾が拡大され、さらに人口の密集を促した。こうした人口密集の村では、王府及び官邸の家塾のような小規模の教

修<sup>4</sup>と称した。教学内容は『百家姓』『三字経』『千字文』『四書』『五経』などがあり、漢民私塾が漢文を学び、モンゴル族の私塾がモンゴル文、満文、漢文の三種の文字で学習を行っていた。

清朝年間は私塾の発展が最盛期に達したのである。私塾がほとんどの村に分布され、普通の青少年の教育を受ける場所となった。私塾は経費由来によって区分すると、家塾、村塾、教館（学館とも称す）と三種類に分かれるようになった。

家塾は地主、官僚、商人など富裕人家が自分の家で先生（塾師）を招いて、子女に教育を施してもらうことを指す。これらのお金持ちが先生にある程度の報酬をあげることは前述した東修とほぼ同じ意味のものである。村塾は地方（村）、宗族からの寄付金或は寄付田の賃貸金を使用して先生を招聘し、民間の子弟を対象に教育を行うことを指す。塾師が自ら教育を行う場所を設け、生徒を集めて、ある程度の学費を納入して教育を行う形式を教館と呼ぶのである。

これらの塾師はほとんど科挙試験に落ちた優秀な人々から成り立ち、生徒たちに対する日常教授が非常に厳しかった。

私塾では生徒の入学年齢は原則的に制限がないけれども、五、六歳から二十歳ごろが殆どで、一人の塾師は最多二十余名、最少数名の生徒を教えるケースが普通だった。生徒の父兄たちの私塾に対する期待は高くなく、生徒たちは字が読めたり、帳簿を作ったり、対聯が書けたりする程度のことしか望んでいなかった。また、私塾の教学原則と方法について、啓蒙教育段階における教養教育は非常に重視されていた。啓蒙児童に良好な道徳品質と生活習慣を養う教育が強調される。例えば、行為礼儀に関わる着服、両手を前に交錯しておく（叉手）、道を歩く（行路）、視聴などに具体的な決まりが定められてある。このような基本教育を行うと同時に『三字経』『千字文』『四書』『五経』の教授を行い、さらに生徒たちに詩や対句作りまでの上達を目指すのである。教育方法において、完全に注入式といった伝統的方法を取り入れていた。授業中、先生は正座し、生徒たちは順番で先生の前の机に本を置き、傍らに立ちっぱなしで先生の解説を聞く。それから、先生が生徒ごとに再度復述するよう命じて、生徒たちが完成した後、それぞれの席に戻って朗読し始める。実は、先生が朗読するよう命じた内容はすべて暗記する内容となっているので、生徒たちには授業中高度な集中力が要求されるのであった。

表Ⅱ. 1 喀喇沁旗塾学表

区 (乡) 名	塾学(所)		塾 师 (人)	学 生 (人)	区 (乡) 名	塾学(所)		塾 师 (人)	学 生 (人)
	家 塾	私 塾				家 塾	私 塾		
旺业甸	1	10	11	158	牛家营子	1	45	46	796
王谷府	1	4	5	63	头道营子		2	2	
上瓦房		2	2	26	楼子店		4	4	84
公谷府		5	5	90	马蹄营子		8	8	166
大西沟	2	3	5	56	甸子		6	6	227
四十家子		7	7	130	乃林		7	7	144
大牛群		4	4	86	西桥	1	8	9	171
小牛群	2	5	7	140	宫营子		2	2	26
南台子		15	15	239	合计	8	137	145	2602

出典：喀喇沁旗志編纂委員会編、『喀喇沁旗志』（1998） 952頁

育場では大勢の旗民子弟の教育要望に応えられなくなり、次第に民営の塾が各村で現れ、しかも、その数は数軒から十数軒に増加していった。例えば、王爺府鎮の（殺虎营子）、旺業甸鎮の（奈林溝門）、（西按其瑪溝）、乃林鎮の（甘蘇廟）、（他卜营子）、美林郷の（大营子）、大牛群郷の（三家）など村々にそれぞれ数軒から十数軒の塾が開設された。それらの中で、塾の数が最多であった牛家营子では45軒も開設され、学生数は八百人にも上った。これらの私塾それぞれの分布、塾師、生徒らの実数などをもっと詳細に表わしているのは表Ⅱ. 1である。

これらの私塾が当時の内地とほぼ同じ管理及び教学制度を取り入れ、教授時期は常時及び季節と二種類の形態を採り、教諭（塾の教師）は地元もしくは外村から招聘し、教諭たちの報酬を「東

こうした私塾を伴ったもう一つの学習場である寺院での学習も栄えてきた。寺院での学習は費用全部免除となっているため、貧しい家庭の子弟がそこに行けば、食することが保障できるうえ、教育も受けられるのである。だから、生活は富裕ではない旗民の子弟を寺院に行かせるのは極普通だった。当時、比較的規模の大きい寺院は内モンゴル地区の宗教、文化、教育の中心地となっていた。例えば、多倫諾爾匯宗寺、東土默特瑞應寺、科左中旗瑪拉沁廟などの大寺院は各々経院学部を設け、一部のラマ生を募集し、医学、密学など高等課程の授業を行い、大勢の医学人材を輩出したとされる。<sup>5</sup>

自元朝智然和尚在旗内創建龍泉寺後至民国初年、旗内有大小廟宇60余所、住廟喇嘛2100多人。從目不識丁頑童到能識經誦文的僧人或僧医靠的就是喇嘛学塾。

引用文中の下線は筆者が引いたもので、「喇嘛学塾」とは寺院、ラマ廟での教育を指している。なお、寺院に入った子弟らは、経典を学ぶために、先ず蒙古文字とチベット文字を勉強して、ある程度の言語能力を有した後、経典を学ぶのであった。しかし、内モンゴル地域のほとんどの寺院ではチベット語でお経を習っていたので、チベット語の授業が蒙古語の授業より主であった。寺院の学習は高級及び初級の二段階に分かれ、初級段階は普及教育であり、寺院に入居した僧侶たちが初級段階の教育を受ける。初級段階の教授内容は体力労働と宗教活動以外、教師の指導下で蒙古文とチベット文の字母、発音から語彙、会話、閲読までの内容を身につけさせ、更に仏経を熟練に唱えられるようになれば、初級段階の教育が修了となる。高級段階は専門訓練を行うので、少数の成績優秀な僧侶らが学習に参加できる。授業内容は世界に対する見方（世界観）や宇宙万物の解釈を主要内容にし、段階ごとに試験を行い、不合格者をもう一年復習させ、成績優秀者には一層上位の称号を授与する。教学方法については、主として討論や弁論の方法が採用されていたが、時折に弁論コンテストも行われていた。授業中、教師が低学級の生徒に蒙古語とチベット語兼用の形式で説明するのに対し、高学級の生徒は完全なチベット語の教授だった。学習過程中試験が行われるが、試験に合格した成績優秀者に独立行医資格が授与され、医者になる。また、これらの生徒の中からもっと優れた

者は青海やチベットなどに派遣され、より一層深い研究を行わせるのである。

こうした私塾と寺院での学習は蒙古人が教育を受ける主要な手段として内モンゴル全域で長年並存してきた。そのうち1899年になると、喀喇沁右旗王府で私塾と異なる義学が開設されたのである。

義学は義塾とも称され、北宋時期に起源する。義学は専ら民間の貧困家庭の子弟らに教育を行う学校であり、その開設は一部分の官員、地主の出資によるほか、祠堂地税や個人寄付金によるものもある。この点で前述した村塾と似ているが、義学は生徒の学費を一切免除するうえ、処により学習用品を無料で提供するということから貧困家庭の子女にも就学機会が可能となった。これは民間教育の普及及び社会低層から知識者を養成するのに重要な役割を果たしたのである。

さて、喀喇沁右旗王府での義学は1899年（光緒25年）、貢桑諾爾布が郡王を世襲した直後、まもなく王府大営子に設けられた。生徒は最初12名が受け入れられ、錢士林という先生を招き、教材は『百家姓』『三字経』『千字文』などを使用した。生徒と教師の食事と学用品を王府から無料で給与し、それに貢桑諾爾布本人が毎年試験を行い、成績優秀な生徒を激励するために「文房四宝」を奨励した。儀学の運営を長期維持することができなくなり、1902年に崇正学堂の創設にあたり、義学が崇正学堂に合併された。

義学は私塾と似たような教育内容を取り入れたが、生徒の身分や管理方法からみると、従来の王室子弟及び貴族子女らのみを対象にした私塾と異なり、社会低層の一般家庭の子弟でも学費を払わずに教育が受けられるようになった。食事無料提供と学費免除といった点では、寺院での教育形式と類似しているが、学生の身分はラマではないから生活上の戒律などに拘束されることはない。そのうえ、寺院での御経の勉強より科学知識の学習は人々の知識を深め、世界を合理的に知る意識が高まることなのである。また、儀学は身分階層、出身貧富の区別なく、入学さえすれば自由に勉強ができる合理的な教育場所であった。しかも、生徒らの日常生活から試験にかけて郡王の貢桑諾爾布本人が配慮していたということからこの郡王には教育を重視する先進思想がすでに根付いていたことが分かるのである。

## 二、貢桑諾爾布と革新政策



図Ⅱ. 2 喀喇沁右旗郡王貢桑諾爾布

(出典：趙林海主編『開明蒙古王—貢桑諾爾布』  
喀喇沁文史資料, 2007)

喀喇沁右旗では学堂が創立され始めたのは1902（光緒28）年からだった。学堂づくりは清政府が1901（光緒27）年に公布した諸改新政策の一策であり、教育革新政策の実施を通して強国富民を目指した維新運動である。内モンゴル地方では、この維新政策を一足早く積極的に取り入れ、領域の旗内で諸改新運動を早速開始したのは喀喇沁右旗郡王を世襲したばかりの貢桑諾爾布であった。

貢桑諾爾布<sup>6</sup>は1872年に喀喇沁右旗前郡王であった旺都特那穆濟勒の長男として生まれた。前郡王が将来自分の王位を継ぐのは長男の貢桑諾爾布の他にないと決めていたため、貢桑諾爾布に幼い頃から郡王に相応しい知識と教養を身につけさせることに全力を注いだ。喀喇沁右旗はそもそも蒙古族を中心とした地域なので、蒙古族の文化、風俗を保つのは当たり前のことである。また喀喇沁右旗の歴代の郡王は清政府と縁戚を維持してきたため、清政府からの配慮や保護をずっと受けていたのである。そのため、清政府の庇護下に領域内での政治支配をうまく展開するために満族語と満族の事情を理解することも不可であった。当時、清政府は内モンゴル地区に対し、「移民実辺」<sup>7</sup>政策を実施していたので、山東、山西、河北などから大量の漢民族が喀喇沁右旗に移住し、そこで多民族共生の状況が構成された。また、チベットから伝わってきた仏教の一つであるラマ教が蒙古人の生活の隅々まで浸透し、社会生活の運営を左右する力を持つ存在になった。以上の諸実情を背景に、貢桑諾爾布は蒙古語、満州語、漢語、チベット語など少なくとも四つの言葉及び文字を学習しなければならない現実に直面した。しかも、言葉や文字だけの勉強に留まらず、それらの諸民族それぞれの歴史、宗教、文化、風俗などを理解すれば旗民の団結、多民族共栄を実現できる指導者になれる。そのため貢桑諾爾布は幼少年時期から厳しい教育を受けた。彼が幼少年時期から勉強に励んでいた記録が『内モンゴル近現代王公録』<sup>8</sup>の中にも伺われる。

貢王六歳那一年，就有山东聘请一位姓丁的人为

启蒙教师，同时还让他从喀喇沁中旗蒙文学者伊成贤学习蒙，满两种文字。……在十四，五岁时已熟读四书，五经和一些古典诗文，能写八股文，会试贴诗。他父亲又强迫他从一位在西藏住过多年的喇嘛攻读藏文经卷，从河北省的武术家练习拳击和骑射。因此他在学问，品德和体魄方面，都受到一定程度的锻炼和教养。

上記の引用文は貢桑諾爾布が勉学に努力し、幼い頃から郡王になるため向けの教育を受けた、王位を継ぐ頃には学問や教養を備えたしっかりとした青年に育っていた。彼が詩集を作ったり、書道を楽しんだりしたことからも学問の該博であることが伺われる。図Ⅱ. 3は河原操子に贈った彼の直筆の書である。その流れる様な毛筆字は彼の才能を十分表現しているであろう。

1887（光緒13）年、光緒皇帝の許可を賜り、15歳の貢桑諾爾布が清皇親親王隆勤の娘（嗣王善者の妹）である善坤と結婚し、皇女の夫君となった。それにより何世代も継続されてきた満蒙縁戚関係が断ち切れることなく維持された。このような縁戚関係は清政府と喀喇沁右旗の親しい関係を一層固め、貢桑諾爾布の後日の政治活動上にもこの上なく便宜を与えたのである。

1898（光緒24）年、父の旺都特那穆濟勒の死去により、翌年（1899年）27歳の貢桑諾爾布が職爵を継承し、喀喇沁右旗世襲の扎薩克郡王となった。次第に、従来の封建制度を改革し、近代化文明の道を開くことに力を入れた。

1902年から1912年にわたる10年間では、貢桑諾爾布が喀喇沁右旗で旗民の知識を深め、新文化教育と新思想宣伝を目指した学堂を創設し、しかも新聞雑誌の印刷発行事業まで取り組み、また、農業や林業の改革と民間工場の設立も急いだ。その結果、商業や郵政が発達し、電信電話も普及した。貢桑諾爾布の実行した革新政策によって喀喇沁右旗はこの上なく至る所に活気が溢れるようになった。この変化を王国均の『蒙古紀聞』<sup>9</sup>に下記のように描写してある。



図Ⅱ. 3 喀喇沁王が河原操子に与えられた書

(出典：一宮操子『蒙古土産』  
再版、靖文社、昭和19年)

喀喇沁地面气象为之一新。旗务章程，府内规则逐渐更定，比诸前王时代，殊有天壤之别。

1911年の辛亥革命運動と哲布尊丹巴の外蒙古独立宣言<sup>10</sup>の直接影響を受けた貢桑諾爾布が内蒙古独立を図ったが、準備の途中で失敗した。そのため、独立を一旦あきらめ、熱河自治政府の建設に取り組んだ。しかし、外蒙古独立を宣言後、袁世凱政府は特に内蒙古の動向を注視しており、内蒙古貢桑諾爾布の独立運動が台頭するや否や、貢桑諾爾布を蒙蔵事務局<sup>11</sup>総裁の肩書きで北京に招聘した。上京後、彼は蒙蔵事務局在任中の1913年に「用近、現代化的教育内容和方法、為蒙、蔵地区的發展培養有用人材」<sup>12</sup>という目的で、北京に少数民族人材育成の官費学校——蒙蔵専門学校を創立した。

1927年、蒋介石が北洋軍閥政府を打倒し、南京で「国民政府」を成立した。北洋政府の崩壊により貢桑諾爾布の蒙蔵院の権利も略奪された。こうして蒙蔵事務での16年間の活躍の終結により、彼の政治生命も事実上終止符が打たれたともいえる。1931年1月、59歳の時、北京で脳溢血により亡くなった。

貢桑諾爾布の波瀾万丈な生涯は後世の蒙古人に称えられ、仰慕されている。『開明蒙古王—貢桑諾爾布』<sup>13</sup>にも記してある「辛亥革命之前、他是漠南大地上進歩的政治家、思想家、傑出的革新家。」のごとく、後世の蒙古人の誇りとなる偉人が蒙古族近代史の一頁に輝かしい名を残したのである。

さて、貢桑諾爾布の教育改新思想がどのように形成されたのか、これを当時の中国国情に結び付けて考察してみる。

第一次アヘン戦争が起こった1840年から義和団運動勃発の1900年までの60年間で、帝国列強の中国への連発な侵略が、清朝政府下の中国を半殖民地、半封建社会に陥らせた。1894—1895年「日清戦争」が勃発し、清政府の敗北で「馬関条約」が締結され、遼東半島と澎湖列島及び台湾を日本に割譲した。堂々たる大国である清国が新興国の日本に打ち破れた残酷な現実是中国国内の執行部を驚かした。次第に外国に学んだ維新運動を通して国を救う主旨が呼びかけられた。これが1898年の「戊戌維新」運動である。維新運動は開明知識者らから始まり、「変法自強」のスローガンのもと、民族資本主義の発展を目指し、清王朝の封建統治を保持する前提で、君主立憲制を求めた。維新派は全国各地に学会、学堂、新聞社を設立し、新聞雑誌を多量出版し、維新思想の宣伝を積極的に行っ

た。こうした有力な宣伝により、封建主義旧思想や旧文化が攻撃され、西洋の科学技術を学ぶ新学派も急速に増えてきた。維新運動は近代中国歴史上一時的なものであったけれども、その発生は清政府の崩壊を促し、封建制度に抑圧されてきた中国民衆を呼び起こした。

こうした国内外両方の圧力で崩壊の寸前におかれた清政府が統治政権を保持するために止むを得ず、1901（光緒27）年慈禧太后（1835—1908）は光緒皇帝の名義で新政の令を配布した。この新政が各領域に波及したにも関わらず、一番改革性質のある対策は科挙の廃止、学校の創立、外国への留学生派遣など教育制度の革新であった。

ところで、維新運動が最盛期に達した頃はちょうど貢桑諾爾布が郡王に世襲した1899年の前の年であった。また、『開明蒙古王—貢桑諾爾布』<sup>14</sup>によると、1898年初、貢桑諾爾布が北京滞在中にかつての戊戌維新運動の指導者である梁啓超や譚司同らと親密に交際していたとされる。これによると、貢桑諾爾布の維新思想がさらに固められたのはこの人たちの影響も大きかったことが推測される。彼にとって、この維新思想の確定と郡王即位及び清政府の新政令配布といった三つの事件がタイミングよく照応しており、政権を掌握した時から教育革新を実施するのにあらゆる条件が備えられていたとも言えよう。

### 三. 崇正、守正武両学堂

戊戌維新及び清政府の新政令の推進により、学堂を創る風潮が中国全土に広がり、奥地の内蒙古まで波及した。この時期の内蒙古では、ラマ教は蒙古人の唯一の信仰であり、蒙古人子弟らの教育はほとんどラマ廟で行われていた。ラマになると結婚が禁止されていたことにより、蒙古族の人口が年々減りつつあったうえ、文化の立ち遅れが民族の経済発展を停滞させていた。この厳しい現状を実感した貢桑諾爾布は王位についた直後の旗民大会で行った講演の中には

……西欧列強，无论是哪一个国家，毫无例外地都经过了野蛮时期，但由于各国国王们的善于教养本国人民，才逐渐强盛起来。……我旗蒙汉杂居，如果不提高蒙民的文化水平，则势必受到汉民的鄙视和欺压。因此，於公於私，必须创建学校。<sup>15</sup>

と発表した。彼は学堂建設を通して旗民の知識レベルを高め、さらに民族を發展させるよう決意し

ていた。それで、1902—1903年にわたる一年間で後世には「貢王の三学堂」と呼ばれている崇正学堂、守正武学堂、毓正女学堂を創設した。

#### A. 崇正学堂

1901（光緒27）年夏、貢桑諾爾布は清朝政府が発した各州、県に学堂設置の令に乘じ、浙江省錢塘の陸韜という漢人を招き、学堂の規則や教授方法の起草を委託した。そのころちょうど二人の日本人が王府来着し、この二人にも学堂規定の参酌を頼んだとされる。<sup>16</sup> 二人の名前は寿田亀之助と小池万平といい、蒙古現地視察で喀喇沁王府に辿り着いたところだったとされる。<sup>17</sup> 学堂創建の準備は一年かかり、1902（光緒28）年10月にもとの義学を合併し、王府西側（西衛門）に創立された。これが崇正学堂である。学堂創立後最初に募集した生徒数は王府官吏の子弟らを含めた青少年がわずか四十名であり、彼らを初、高級の二クラスに分け、翌年から学齡児童の募集を指令した。学堂は授業中、先生にモンゴル語と中国語を併用して教学を行うように求めた。授業モンゴル文、中国語、日本語、音楽、体育、数学のほかまた、中国語の『三字経』『千字文』『四書』『五経』などがある。学堂には宿舍、食堂、小規模の図書館が設置され、これらは学生の生活に便宜を図り、勉強を奨励するために取り入れた従来の封建教育制度と全く異なる新制度であった。その内容はさらに具体的に記されたものを引用すると下記のとおりである。

……学生的食宿由费公解决；学习用品由学堂免费发给；离校市里以内的女生，早晚上学，回家都用花篷轿车接送；走读生午间在学堂吃饭；住宿生在校食宿，每人每天供给半斤肉，并能吃上一顿面饭；毕业生用公费保送升学或留学，不愿升学的留旗内任用等。<sup>18</sup>

こうした厚い待遇を与えた目的は在学生徒らの学習を励ますほか、より大勢の旗民の子弟らが自ら入学するようになることも期待されていた。さて、学堂における上記各項の優遇政策の実施過程中、それを支える経費はどこから出ていたのだろうか。この経費本源の経緯を『開明蒙古王—貢桑諾爾布』<sup>19</sup>により、下記の五つの方面にまとめておく。

- 1、崇正学堂や毓正女学堂を創設するため、貢桑諾爾布が孟格溝（現喀喇沁王爺府鎮大西溝村）及び湯土溝（現喀喇沁王爺府鎮湯土溝村）の

2400ヘクタール余り（約400頃）の山上の牧場を売却した。

- 2、王府の長年保存していた骨董品や金目のもの及び劇団の劇箱、用具などを売却した。
- 3、1905（光緒31）年、貢桑諾爾布が清政府に五年間の俸禄を一括して要請し、これを学堂経費に充当した。
- 4、貢桑諾爾布が大西溝と湯土溝の200ヘクタール（3000亩）の荒山を貸し出し、学堂の永久の学田にした。
- 5、助学寄付金の受け取りによる経費収入も得られていた。

上記のまとめからみると、貢桑諾爾布が学堂の維持及び発展のために、知恵を絞ったり、あらゆる可能な方法を駆使したりした。お陰で学堂の運営は順調に進行することができた。

学堂は発展しながら、授業科目だけにとどまらず、さらに「編写漢文四字句蒙旗地理教科書」<sup>20</sup>のように、教職員に教材編集の仕事までさせた。また、「為了学生發表政見，学堂増設了報館，隔日出版1次，取名“嬰報”」のとおり、「嬰報」新聞の印刷作業もこの時期から始まった。こうした教材編集や新聞印刷などの事業は、喀喇沁の蒙古人が自ら創りあげた業績であり、これらの成功は内蒙古地域での近代化教育がすでに芽を生え始めたことをもの語っている。

#### B. 守正武学堂

守正武学堂は崇正学堂に引き続き1903（光緒29）年7月に創設された武備学堂である。

1891（光緒17）年、敖漢旗に勃発した金丹道（紅帽子）事変が喀喇沁右旗で急速に広まり、旗内の漢民族と蒙古族が相互に殺し合う事件が幾度も起こり、漢民族と蒙古族との民族対立がさらに激化した。この時、貢桑諾爾布はまだ郡王の位に就いていなかったが、この事件発生の原因や経緯は詳しく知っていた。また、1900（光緒26）年の義和団運動の勃発と八国連軍の侵略により清政府統治下の中国全体で治安が乱れ、奥地の内蒙古地方でさえ社会が不安定状態であった。これらの要因を背景に、貢桑諾爾布が郡王に世襲した際「保境安民」には整備された軍隊が必要なので、地方（旗）には軍隊調達の権限を与えるよう清政府に要請した。この要請が1902（光緒28）年にやっと許可され、翌年に下級軍官の養成を目的とした守正武学堂が創設された。校地は王府西の大西溝門の旧邸に設けられ、開校当時、旗官吏らの子弟を約三十人選抜し、二つのクラスに分け、文化と軍

事訓練という二つの課程を教授した。文化課程には算術、日本語、地理、歴史との科目が設けられ、軍事課程にも歩兵指導要領、射撃教範、体操教範など理論知識以外、監督の指導下に徒手体操、野外演習、射銃法などの軍事訓練が行われた。<sup>21</sup> 本学堂における指導教官に関しては『赤峰市文史資料选輯、第四輯（喀喇沁專輯）』<sup>22</sup> の中に次のように記されてある。

貢王為了培養下級軍官（中略）……經福島中将之介、延聘了日本陸軍大尉伊藤柳太郎、陸軍中尉吉田四郎<sup>23</sup>為正付教官、又聘能操日語的浙江錢塘人姚子慎為翻譯官、学科用日本操典、由日本教官用日本語教課、操練時也用日語口令、是完全日本化的一個軍事學校。

このように、完全なる日本式軍事教育制度を取り入れ、日本人を現地に招き、日本人の指導下で教育訓練を実行したのは初めてだった。崇正学堂においては、学堂の規定の参酌に加わった日本人二人がいたから学堂の規則、科目、時間割などに日本の学校の諸要素が影響したかもしれないが、日本人が日本語を使って直接に講義することはなかった。そのため、守正武学堂では蒙古人と日本人との初めての直接的な接触が始まったともいえる。軍事教官なら当時の中国国内にもいくらでもいたのだろう。しかし、なぜわざわざ日本人教官を招聘し、日本式兵隊の教育訓練を導入しようとしたのか。1903（光緒29）年、守正武学堂が設立する直前、貢桑諾爾布は清政府の許可を得ずに秘密に日本へ渡り、大阪で開かれた勸業博覧会を見学した。その際に日本の各地を回り、工業、教育、軍備などを視察した後、日本社会の発展に驚いた。それを契機に、日本社会各界の有名人ととの交流を通し、教育を普及するための学校づくりや社会秩序を守るための兵隊づくりなどいろいろな啓発を受けた。そして、帰国直後守正武学堂の創設に取り掛かった。実は、貢桑諾爾布が日本訪問中、さらに感銘を受けたのは、実践女学校の校長である下田歌子と面談し、女性教育の重要性を悟ったことである。当時、清朝統治の中国国内でわずかの女学堂が成立されていたにも関わらず、万里の長城を越えたはるかの奥地内モンゴルで貢桑 諾爾布が一軒の女学堂を創立した。それが毓正女学堂である。

### III. 毓正女学堂

20世紀初期、清政府統治下の中国は半植民地半封建社会に陥った一方、資本主義民主主義を唱える有識者らの有力な主張により新式教育制度を導入した学堂が全国各地、特に経済発展している中国沿海地区で相次いで創立された。しかし、これらの学堂の中で女子教育向けの学堂はわずかだった。西洋人により、宗教伝達の目的で創立された幾学堂を除けば、清国人自身の手で創設し、経営している女学堂といえば、1897年上海に設立された経正女校を引き継ぎ、杭州の貞文女子学堂、湖南の淑慎女学、上海の務本女学堂など挙げられる。これらの女学堂も新式教育制度を取り入れた初めての学堂——北京同文館より三十年も遅れていた。同文館は男子学生のみ受け入れる学校であったということから、当時の男女教育があったのか容易に分かる。中国女子教育が封建教育制度の影響下長い年月抑制され、女子教育があくまで家庭教育だけに留まっていた。「女子無才便是徳」を唱える古い倫理道徳意識が女子の思想に深く根付き、教育を無視する概念を合理化してきた。しかし、それにも関わらず、経済が発達していた南方沿岸地区と比較すれば、はるかに閉鎖的で、経済発展も遅れていた内モンゴル地区に早くも上述の諸女学堂とほぼ同じ時期に女子学校が設立された。これが喀喇沁右旗王府で創立された毓正女学堂であり、その創立は近代内モンゴル女子教育の画期的な進歩を象徴したのである。

#### 一. 学堂創設

1903（光緒29）年3月、貢桑諾爾布が日本を訪れた際に、東京の実践女子学校校長下田歌子との談話を経て、帰国後、女子学堂創設に着手した。この女子学堂で日本風の女子教育を実施する目的で、適当な日本人女教師を紹介しよう日本公使館に申し出たところ、公使館が下田歌子を介し、当時上海務本女学堂で日本語教師を務めていた河原操子を推薦した。内命を受けた河原操子は北京から九日間の駱駝驛の旅をし、同年12月21日に喀喇沁右旗王府に到着した。着府の翌日から一日も休まず、「我は学則の編制と机腰掛の調製指示等に、夜を以て日に継ぐ状態なりき。」<sup>24</sup> というように学堂開始を急ぎ、一週間後の28日に開堂式が行われた。校舎は王府内の古い劇場を改装した建物で、王妃である善坤が自ら校長役を担当し、校名は貢桑諾爾布の選定で毓正女学堂と名付けられた。其の中の「毓」という字は「育」の古い字であり、



発音も意義も相通じており、女子を正しく導き育てるという意味である。

1901年、袁世凱や張百熙らの学務大臣により作成された「学堂創設章程」が清朝政府に呈上されたが、当時は実施されず、後の1904年に改めて修正された後、全国に配布し、実施が始まった。この学堂章程の中には女子学堂に關与する内容が一字も取り挙げられず、「将女学婦家庭教育法」<sup>25</sup>のように女子教育を学問分野の中に入れて、家庭教育といった形で預かっていた。女子教育を本格的に男子教育と対等と見なされ、教育機関で認められたのは女子師範学堂及び女子小学堂章程勅定の呈上された1907年3月だった。これによると、1903年創設された毓正女学堂が清朝政府による女子学堂章程の策定より三年も早かったことになる。

## 二. 生徒募集

毓正女学堂が開校した当初、学堂の運営は順風満帆であったわけではなかった。開校当初、王公貴族の娘、府内の仕え役人及び王妹を含めた生徒は二十四名しかいなかった。女学堂は「女子無才便是徳」の古い教育思想がまだ唱えられていた時期に創設された。さらに、「地球が圓きか四角なるかも知らず」<sup>26</sup> といっているように、知識というより極普通の常識さえ欠けていた僻地の旗民にとって、男子すらラマ廟で学習できることがもはや贅沢なことだと思われるほどであったのに、いきなり女子のみを学校に入れて、教育させることは全く納得できないことだった。まして、東洋人（当時は日本人のことを指す）を招いて、直接の触れ合いで教育を行うことが旗民にとって恐ろしいことでもあった。また、王が命じて、百名の女子を日本へ送り、彼女らの骨を取りシャボン（ポルトガル語の石鹼を指す）を作るか、眼球をえぐりとして写真の目に使うかなどの噂が旗内に広がっていたため、多くの旗民が王府からの女子を入学させるようにとの布告に抵抗感や恐怖感を抱き、なかには女兒を連れて他郷に逃げ出すという極端的な行動まで起こっていた。これらの要素が女学堂の生徒募集に相当な支障となった。

このような旗民の様々な疑惑を解き、王府の信用を一層深めるため、貢桑諾爾布王と同様に王妃を始め、皆が知恵を絞り、あらゆる面で工夫を凝らした。例えば、女兒を入学させた家庭の戸口税<sup>27</sup>を免除し、門戸に兵役免除の特許札を掛けてやるなどの奨励方法を取り入れ、女子らの入学を促した。また、学堂における女生徒らの学用品や



図Ⅲ. 1 毓正女学堂会堂式  
(○つけてあるのは王妃、×つけてあるのは河原操子)

(出典：福島貞子『日露戦争秘史中の河原操子』。婦女新聞社、昭和9年)

昼食を王府から無料で給与し、王府外から通学する生徒の往復を馬車で送り迎えするような厚遇を与えるなどの至誠なやり方に父兄らが感化された。そして二カ月経たないうちに

に、父兄らが自ら進んで女子を入学させることにより生徒数は約六十名に増えたのである。

なお、従来清政府が蒙古地方で施行した「愚蒙」政策の影響で、蒙古男性しか受けられないラマ教育に対し、女子のみを募集し、それに様々な積極的な奨励方法を採用した毓正女学堂において、その成立は古い教育制度への衝撃であり、教育制度が停滞していた近代内モンゴル地区において女子教育がすでに芽生えつつあったのである。

## 三. 学則及び授業状況

毓正女学堂が開堂される直前、学則の規定は日本人女教師である河原操子の原案により、貢桑諾爾布郡王が漢文に訳したものであるとされる。<sup>28</sup> 学則は全部で三十条から成り立ち、学堂の宗旨から学制、学年、学科、時間割、教職員、賞罰制度、休曜日、服飾まで詳細に定められ、あらゆる内容が合理的に整っていた。学則の諸規則には女学堂の特質がある程度反映されているので、其の中から幾つかの内容を引用して、試みに分析しよう。

まず、学堂の宗旨は「発達知識健全身体養高尚之性情立賢良之基礎」<sup>29</sup> と定められた。つまり、女性の基本は知識、体の発達及び教養のある良妻

毓正女学堂学科分列									
修身	蒙文	漢文	日文	歴史	地理	算術	理科	園畫	家政
口授	撰讀	撰讀	讀本	中國	中國	珠算	博物	自在畫	禮式
	撰讀	撰讀	會話	外國	外國	筆算	衛生	衣服	使役
	撰讀	撰讀	作文				生理	裝束	禮記
	撰讀	撰讀	文法					烹調	看護
	撰讀	撰讀	文法					料理	育兒
	撰讀	撰讀	文法						裁縫
	撰讀	撰讀	文法						完成法
	撰讀	撰讀	文法						裁縫法
	撰讀	撰讀	文法						普通體操
	撰讀	撰讀	文法						唱歌
	撰讀	撰讀	文法						洋琴
	撰讀	撰讀	文法						普通體操

図Ⅲ. 2 毓正女学堂の学科分列表

(出典：喀喇沁王府陳列室、2008)

賢母になることであると唱えられた。だから、いかに女性教育と言われてもそれはあくまで女性をよい妻、よい母親になる道へ導くだけのことであった。

次に、学年は毎年二月十五日から十一月十五日までを一学年と決め、学年を三学期に分け、二月十五日から五月十五日までは第一学期、五月十五日から八月十五日までは第二学期、八月十五日から十一月十五日までは第三学期と定めた。学科の分列は図Ⅲ. 2に表示した通りである。

最後に、授業の時間割りに関しては、六十名の生徒を三学級にわけ、それぞれ頭班、二班、三班と名付け、教授を行ったが、ここで、それらの中から頭班の時間割をまとめて表Ⅲ. 3に表示したものである。

表Ⅲ. 3 毓正女学堂授業時間割表

時間 曜日	10:00-10:50	11:00-11:50	13:00-13:50	14:00-14:50	15:00-15:50
月	日文(河原)	習字(伊)	算術(河原)	温 習	漢文(汪)
火	蒙文(伊)	日語(河原)	唱歌(河原)	習字(伊)	歴史(汪)
水	日文(河原)	体操(河原)	算術(河原)	温 習	修身(汪)
木	蒙文(伊)	図画(河原)	体操(河原)	家政(河原)	地理(汪)
金	日語(河原)	唱歌(河原)	習字(伊)	編物(河原)	漢文(汪)
土	蒙文(伊)	図画(河原)			

出典：河原操子の『蒙古土産』(昭和19年)の182頁の記述により、筆者が表に作ったものである。( ) の中に担当教師の苗字が記載されている。

表Ⅲ. 3の時間割からみると、蒙、日、漢文及び習字という言語授業に割り当てた時間は全講義時間の半分ほどを占めており、歴史、地理、理科などの科学知識の講義時間は比較的になかった。因みに、科学知識の教授より言語、家政の授業ははるかに重要視されていた。これは、河原操子が帰国の際に伴った三名の教え子の旅中の様子からも分かる。彼女らは汽車にも驚き、汽船にも驚き、渺茫とした海にも驚いた。この三名の女生徒はいずれも成績が優秀で、王府の官吏のお嬢さんらであったが、彼女らの知識取得は単なる「良妻賢母」になれるほどのレベルに留まっており、さらに時事や法律などの政治関与の知識は一切伝授されなかった。即ち、毓正女学堂は当時の社会発展に追い付き、近代化文明精神を移植しようとしたにも関わらず、その置かれた歴史時期は、封建制度が完全に崩壊していない段階であったから、女性であるかぎり、家庭に努める天職を尽くし、温良貞淑であることを主張する男性中心の封建思想の枠から脱出できなかつた。女学堂の開設は女子ら

が教育を受ける有難い機会を獲得したとしても、それが当時の中国の資本主義政治家らの提唱した女性解放運動にははるかに及ばなかつた。しかし、当時の内蒙古地域では女性の社会地位が徐々に重視され始めたことを反映している。

このような封建思想の烙印が女学堂の学則の第二十条に定めた平日学堂内及び途中で、王、王妃、太後(王の母)及び王府の貴人に対面する際に、最敬礼の御辞儀をし、普通の教職員に軽いお辞儀をすることなどの決まりに表れている。また第十四条の休日の中に王爺、普晋千秋、皇上、皇太后万寿、家廟大祭日などを記念するためにそれぞれ一日の休みを設けた。生徒らにこれらの具体的な規則を厳守させることを通して、忠君尊王の思想を注ぎ込み、郡王の至高無上なイメージを樹立しようとした封建階層意識も潜んでいた。

再び図Ⅲ. 3を見てみると、毓正女学堂の学科分類は言語、家政の教授のほか、地理や歴史のような自然科学知識の授業も設けられ、それほど深い内容まで及ばなかつたけれども、従来の『四書』『五経』の勉強とは異なる自然規律と世界を科学的に認識できるようになった。科目の設置も学則の主旨も「知識を発達させ、身体を健全にし、高尚な性情を養成するのは賢良の基礎なり」に従い、女子の品性を育成する唱歌、編物、図画など技芸の授業が設定され、これらが女生徒らの学習興味と意欲を向上させ、学堂の雰囲気と融和で活発にさせる面ではこの上なく大きな影響を与えた。ここで、『蒙古土産』<sup>30</sup> から女生徒らの日本語成績を表した作文を二、三引用して、参考に取り上げたい。

(一) 左の文の全体を平仮名に書き改め、附点の語に漢字をあて、○の助に助辞を挿入し、更に其の全文を漢訳せよ。

- 一、カド○マヘ○キレイ○コガハ○アリマス。  
コレ○ウシロ○コヤマカラナガレテクルノ  
デゴザイマス。
- 二、オトトヒカラ、フリツヅイタオホアメデ、  
ミヅカサ○タイソーフエマシタ。

答 案 頭班 蘭 貞 (王妹)

一、門の前にきれいな小河があります。此は後の小山から流れて下るのでございます。

二、一昨日から降りつづいた大雨で水かさがたいそーふえました。

右漢訳

門前有清涼小河、這里是從後山流下來的

昨天連下大雨水很流了

(三) 左の文を和訳せよ

一 再五六日就要作繭

二 很聽話的馴良的馬

答 案

一 も、ごろくにちもたたら、まゆをつくるで  
ごさいませう。

二 よくゆーことをきて、うとなしい、うまで  
ごさいます。

頭班 蘭 貞 (王妹)

作文

春

ワタクシハ、ハルガタイヘンスキデス。ナゼス  
キデスカ。イロイロノハナガキレイニサイテヲリ  
マスカラ、ワタクシスキデス。

二班 宝 貞 (留学生)

図Ⅲ. 4 毓正女学堂学生成績表

(出典: 喀喇沁王府陳例室2008)

引用文の中の宝貞は後留学した保貞のこのことである。「宝」と「保」の中国語の発音は同じだから、同発音で異なる文字で書かれたものだと思います。上記の和訳で、「も」は「もう」、たたらは「たったら」「ゆー」は「いう」、「きて」は「きて」、「うとなしい」は「おとなしい」とそれぞれ訂正するとただしくなるようだが、作文「春」には間違い表現が出ていないようである。このような女生徒らの語学の記憶力による日本語成績の上達ぶりを、女性史研究者の山崎朋子氏は『アジア女性交流史 (明治大正期篇)』の中で「それまで、全く教育というものを受けたことのない蒙古の少女たちが、蒙古語、中国語、日本語を同時に習い始めて二年足らず、しかもその構文と文法のむずかしい日本文を、兎にも角にもこれだけ綴れるようになったことは、大きな成果と言うに値するのではないだろうか」<sup>31</sup>と女生徒らの記憶力と努力に驚嘆していた。図Ⅲ. 4も当時の女生徒らの日本語の成績を証明するものである。

なお、これらの女生徒になぜ日本語を学習させ

るためか。しかも、日本語学習にほかのどの教科よりも力を入れたことが窺われる。例えば、表Ⅲ. 3の時間割からみると、日本語教科に与えた時間は週に4時間あるのに対して、母語としての蒙古語教科はそれより1時間も少なくなっている。しかも日本語以外に絵、歌、体育、算数、家庭科など科目の授業も日本人教師の河原操子一人によって行われた。これがもっぱら言語の教育を除き、他の科目にも日本語を用いて授業を進めることにより、日本語を伝授するという目的を達成しようという狙いであったかも知れない。

また、科目の設置からみても、日本の女子小学校の科目とほぼ同じようであり、さらに、それをありのままに毓正女学堂に移植しようという努力があった。参考のために当時の日本の高等小学校の科目設定を引用しておく。

第四条 高等小学校之教科目為修身、読書、作文、習字、算術、本国地理、本国歴史、外国地理、理科、図画、唱歌、体操、又為女兒加裁縫一科。<sup>32</sup>

これだけに留まらず、女学堂では日本の祝祭日に当たる日を休日と定めており、例えば、お正月に三日、紀元節、天長節、地久節にそれぞれ一日休暇するといった具合なのである。また学堂開堂後半年経った頃、開催された園遊会もまったく日本の園遊会のようなものであり、開催が予期したとおりの成果を果たした。上述から毓正女学堂は日本の女学校となにかの関係があるのではないかという疑問を抱かせるようになる。確かにそのような例があった。山崎朋子氏が『アジア女性交流史 (明治大正期篇)』<sup>33</sup>の中で「毓正女学堂は、日本の女学校の分校ではないか」という疑問を提出しており、しかも、これを論証できるような実例を幾つも挙げた。その中の一つに、日露戦争の火蓋が切られた直後、前線の兵士を慰問するために、毓正女学堂の女生徒たちに毛糸製の巾着を五十五点編ませて、書かせた慰問文も添えて戦場の兵士たちに届けるよう婦女新聞社に取り次ぎを託したということがある。この慰問文<sup>34</sup>が1905 (明治38)年出版の雑誌「をんな」十月号に写真版で紹介されているとの記述があるのだが、ここで、この部分を転用する。

このあみものは、私どもが、東洋のために、おつくし下さる、おぢさま方に、さしあげたいと、おもひまして、いつしようけんめいにこしらへま

したものでございます。まことに、ふできでございますが、どうぞおついでの際に、おぢさま方へ、おあげ下さる様に、おねがいひもうしあげます。そしてわたくしどもが、毎日ねつしんに、勉強してをりますことをも、おつたへ下さいますやう何分おねがいひもうし上ます。さよなら。

七月初九日

水仙

婦女新聞社 皆様お前に

また、『カラチン王妃と私』によると、これらの編物は恤兵品として、種類及び数量の制限があったため、受理されるに至らなかった。しかし、恤兵部へ献納を依頼された婦人新聞社社長福島四郎から河原操子への関連書簡には「蒙古の女子生徒の寄贈であれば、必ず特別なことを以て受理すべく」と書いてあるが、この点から見ると、女学堂は確かに日本の女学校の分校であることが間違いないように思われる。

しかし、こうして毓正女学堂の生徒たちに日本語を懸命に勉強させ、学堂の秩序も日本の学校と大差ないように整然と立てられており、また、女生徒たちに戦場の日本兵たちへ慰問用の編物まで編ませるなどすべてのことがただ一人の日本人女性河原操子の努力により順調に進展していった。

さて、当時の中国の教育界には近代教育を受けた女教師はいくらでもいた。それなのに、なぜ毓正女学堂はわざわざ日本人女教師を招くことになったのだろうか。これは貢桑諾爾布の政治策画であった。清政府の日増しに衰退していく実態を目の当たりにしてきた彼は、清政府から蒙古族を救い出すのは独立するしかないと考えた。しかし、蒙古族地方全体の社会経済は遅れていて、ただ自民族の力に頼っては独立できないと分かっていた。それで、最初はロシアの力を借りて蒙古の独立を図り、積極的にロシア人との交流を深めた。例えば、1903（光緒29）年の秋、崇正学堂から成績優秀な学生を四名選び、北京の東省鉄路ロシア文学堂に派遣し、ロシア語を専攻させた。<sup>35</sup>しかし、日本が強大化するにつれて、中国や東南アジア諸国を欧米帝国の支配から解放し、日本を盟主に共存共栄の広域経済圏をつくりあげるといふ主張により、日本の中国での勢力が拡大するに伴い、貢桑諾爾布の親ロシア思想も徐々に親日思想に傾き、さらに、日本の蒙古懐柔策の影響で蒙古独立には日本がより頼もしい勢力であると信じ始めた。だから、彼は極秘に日本に渡り、現地を視察し、帰国後日本の女学校を模倣した女子学堂を創立した。しか

も、日本人女教師の河原操子を招聘し、日本式の教育法を行わせた。

河原操子が毓正女学堂を日本の女学校のように営み続けられたのは郡王貢桑諾爾布の許可を得、また、王妃も積極的に応援したことによるものである。郡王及び王妃は日本が頼もしい見方であり、いざという時に助けてくれるだろうと思っていたからこそ、相互に助け合い、友好関係を維持するうえで、日本の進んだ教育制度を導入することも不思議ではないだろう。

#### IV. 毓正女学堂の教師——河原操子

##### 一. 毓正女学堂に赴任前の河原操子

###### A. 清国人教育への志

実は、河原操子は教師になったといっても、幼少年時代に立てられた一つの志を絶えず燃え持ち続けていたのである。それは清朝国女子教育に尽くそうという念願であった。この願いは一夜にして芽生えたものではなく、彼女の成長期における父親の影響が絶大である。

河原操子の父の河原忠氏は、曾一右衛門の三男で、家学の漢学に造詣が深く、子弟の教育を楽しみとして、名利の念に淡い隠士風の人であった。明治26年、日本国中を驚かした快拳とされるシベリア単騎横断を成し遂げた福島安正大將は、河原忠と同郷かつ同年生れという不思議な縁で知り合い、鬢髪が白くなるまで、二人の友情は続いとされる。この福島安正大將は後の満州事変にも関わるが、この時期から軍部の関係で清国への出入りが頻繁で、中国通の第一人者ともいえるほどだった。河原忠も漢学に造詣が深く、清国の事情に関心を持ち、東洋の将来を予測して研究してきた人物である。二人は度々交渉を通じて、清国に対して共通の認識があった。それは、東洋の恒久平和を守るには日清提携を固くすることが基礎であるということである。また、「国家百年の計は教育にあり、国を富ますも、強くするも、根本は教育だ」と、口ぐせのように言い、憂国の志は深く、教育の力によって、清国人と親しみ、信頼されればこそ日清提携が可能となると信じていた。父のような思想の影響を受けながら育った河原操子は日清問題が祖国、さらに東亜平和に関する重大なことだと悟り、清国人との信頼関係を築く為には、まず清国人の教育に携わるべきでだと認識していた。

この志を抱いた第二の要因は、彼女の親に対する孝行心もあるようだ。河原操子が十四歳の時に

母親が心臓病で亡くなり、当時四十歳の父親と娘が悲しさに耐えて、互いに頼りあって生活を送った。父は何度も再婚を勧められたが、一人娘を継母にまかせたくない頑なに断り、娘の学業と将来に専念したのである。まさに、河原操子が新版『蒙古土産』<sup>36</sup>の入蒙当時の回顧し、書いた「此父の念願を達せしめるやうな仕事をするのが、何よりの孝行だろう」と言う言葉通り、父の志を自分の念願に重ねて固く抱きしめ、この願いを達成することこそ父への最高の孝行だろうと考えていたのである。

第三の要因は、当時の日本社会における外国との影響もあつただろうと考えられる。日清戦争後、大国清が日本に負け、講和条約により遼東半島を日本に割譲したが、ロシア帝国の返還要請に抵抗することができず、遼東半島を返還した。この屈辱を二度と受けまいに日本国は政治、軍事、経済の各領域の力を増強する必要があり、それに伴い愛国主義も鼓吹されたのであつた。このような時代的風潮の中で二十歳頃の青春期を送った河原操子の中に濃厚な愛国心が芽生えたのは不思議ではない。この愛国心が河原操子の清国女子教育の実践全過程を貫いていたのである。

#### B. 清国人教育への第一歩——横浜大同学校へ赴任する

河原操子が故郷の女子学校に勤務した頃、日本の女子教育界で名を知られた第一人者がいた。その人は実践女学校長の下田歌子であつた。この下田歌子との一通りの面会は河原操子の運命を劇的に変えていった。

河原操子は故郷の教壇に立っていた頃から、下田歌子を敬慕し、彼女に関する新聞記事やニュースなら、一つも見逃さないように心掛けていた。ある日、下田歌子が旅行で信州を訪れることを新聞で見て、「好機逸すべからず、年来の志を訴へて先生の御助力を乞はゞ」<sup>37</sup>と女学校長の紹介を得て、下田歌子に面会し、自らの清国人教育に従事したいという長年の宿願を訴えた。一通りの面会で下田歌子という知己を得て、1900（明治33）年9月、横浜市に日本在留清国人の女子のため、清国人が経営していた大同学校で教鞭を執ることになった。清国人の教育にあたる最初の日本女教師だつた。また、河原操子本人にとっては、積年の希望を実現する為の第一歩を踏み出したと言えるかもしれない。

大同学校で授業しているうち、生徒たちともっと親しく交流し、信頼される為、中国語（当時

は支那語と呼ばれていた）の勉強を始めた。生徒たちの成績も予想以上に上がり、その功績も認められた。しかし、清国人との交流が深くなればなる程、徹底的に知りたいという欲望が強くなり、どうしても清国の本地に赴き、家庭の事情までも見聞したいと思ひ、そのような機会が訪れてくるのを期待していたのである。

#### C. 日本から最初の女教師として上海へ赴任する

1902（明治35）年の春、上海から下田歌子に一通の手紙が届いた。この手紙の差出人は上海務本学堂の創設者兼校長の呉懐疚であつた。呉懐疚は南洋公学堂の出身で、早期から女子教育の必要を認めており、上海務本学堂の創立に当たる教育担当者は日本人及び清国人に限り、西洋人を加えることを拒む主旨で下田歌子に適当な日本人女教師の推薦を依頼した手紙を送った。しかし、この推薦される人はだれでもよいというわけではない。これは日本国から清国女子教育に赴かせる初めての女教師であるため、責任の重大さがどれほどであろうかは言うまでもない。しかも、当時、日清両国人の往来は官吏、公使といった上流社会の人々に限られていて、一般人の交流はごく少なかった。思慮に思慮を重ねた結果、この人選に最適な人物は河原操子の他に居ないと決め、本人の意向を尋ねたところ、千載一遇の好機を逃すはずがないというように即時に応じて、上海務本女学堂に赴任することになった。

#### 二. 毓正女学堂外での活動

上海務本女学堂の教育活動は日増しに、成果を

あげ、内蒙古喀喇沁王府へ教育顧問として赴任するよう内命を受けた。これが1903（明治36）年の夏のことであつた。この頃、喀喇沁右旗郡王の貢桑諾爾布は日本訪問を経て、王府には日本風の女子学堂を設け、蒙古女子に教育を施す意で日本駐北京公使館に日本女教師



図 . 1 平服の喀喇沁王・王妃と河原操子

（出典：福島貞子『日露戦争秘史中の河原操子』、婦女新聞社、昭和9年）

の紹介を申し出ていた。当時の内モンゴは清政府の管轄下、経済や教育など諸方面で相当遅れていた

実態を前文ですでに述べたが、「数千来眠れる蒙古の開発」といったような蒙古女子教育は甚だ難難なことは想像できる。河原操子がこの大役に選ばれたのは、横浜大同学校及び上海務本女学堂を経て、教育における経験を積み、見聞見識も広がり、蒙古女子教育の一端を担う力がすでにあっただからといえよう。

河原操子が上海を出発し、北京經由喀喇沁へ向かう旅はいかに苦難だったが、彼女の『蒙古土産』に詳しく記述してある。喀喇沁王府到着翌日から、毓正女学堂の開校準備に取り掛かったその時期より帰国するまでまる二年間の歳月をこの女学堂で教育に専念しながら過ごした。女学堂における授業と滞りなく円満に進行していった経緯は前の章で述べたが、それとは別に、学堂外における活動からも彼女の人間性の一面に触れてみたい。

河原操子は日本の園遊会を模倣した会を提案し、毓正女学堂が開堂した。翌年の果実が豊富である秋に開かれた。日本で開催されていた園遊会とは、広義の意味では野外で行われる宴のことであるが、日本では一般的に、天皇、皇后が主催する野外での社交会を意味する。園遊会には、時の衆、参両院の議長、副議長、議員、内閣総理大臣、国務大臣、最高裁判所長官、判事、その他の認証官など立法、行政、司法各機関の要人、都道府県の知事、議会議長、市町村の長、議会議長、各界の功労者とそれぞれの配偶者約2000人が招待される。1953年より毎年秋だけに行われてきたが、1965年より春と秋に行われる現在の形となった。それぞれ「春の園遊会」、「秋の園遊会」と呼ばれる。会場は赤坂御苑。招待者の名簿は当初から公表されてきた。こうして見ると、日本の園遊会とは普通の民衆を対象にしたものではなく、上流階級の人々の交流を深める目的で設けられたものであるようだ。

さて、河原操子が喀喇沁王府で園遊会を開くよう主張した狙いがなんであったのか。これを三つの方面から分析してみたい。

その一、女子教育思想の普及を宣伝するためであった。前にも述べたように、毓正女学堂が開堂した当時、生徒募集の際、様々な奨励方法を取り入れたが、旗民の不信感はいまだに強かった。女子教育に対する認識を変えさせるには、その重要性を幅広く宣伝すべきだという考えで園遊会が開かれた。来会者には貧富官民の区別なく、自由に参加できるようにした結果、会は盛況を博し、一番多い時には七百名にも達した。会場の秩序を整

然と守るため、来会者に入場券を配付し、その等級により異なる招待を行うようにした。例えば、園遊会開催当日のスケジュールは午後一時から四時まで演説や遊戯、参観などの順序で、その後飲食招待が始まる。そこで、一等券持参者は会食後に散会、二等券持参者は茶菓子所で随意に飲食可、三等券持参者は園内観覧のみとの規則があり、園遊会の内容が多彩多義で、参加者の歓喜を集めていた。園遊会の会場風景及び配付された入場券は図Ⅲ、2に表示されたとおりである。

その二、旗民に対して、河原操子の女学堂での身分を明確にするためであった。遠い日本から若い女性が一人で蒙古に来ている訳を知らない旗民の疑惑は園遊会で彼女に会い、話を聞いた後、すっかり解かれてしまい、かえって、親近感を抱くようになった。

その三、日蒙親善の思想を植え付けるためである。喀喇沁の一般旗民において、それまで外国に対する知識と言え、中国という大国が地球の中央にあり、西には西洋という所があり、東には豆粒のような小さい東洋（日本のこと）があるという程度だった。目に馴染んできた外国人といえば、ロシア人ぐらいのものであった。日本はどのような国であるのか全く知らないのに、菓をくれたり、女子らにいろいろ教えてくれたりする人柄の良さそうこの女性の言動から日本という国に自然と親近感を抱くようになったのであろう。さらに、園遊会に来ている来会者に日本の歌を聞かせたり、国内外の色々な品を見物させたりしているうちに、旗民の心の中で日本国のイメージが自然馴染んでいったのである。

### 三、河原操子による日本留学

河原操子の喀喇沁での仕事は一年契約となっていたため、1904（明治37）年の末になると契約が切れて当然ながら帰国するはずであった。ちょうどその頃、王及び王妃に伴い上京した時に、先輩や友人から帰国を勧められたが、彼女は王妃の厚い信頼と生徒らの無邪気な愛情から離れがたく、また、女学堂が創立されてからたった一年しか経っておらず、基礎さえ出来ていない状態であった。このまま辞退していくのは彼女にとってもとても残念なことであった。こうして代わりの人が見つかるまで契約がもう一年延長された。ついに1906（明治39）年1月に帰国することになった。王妃の「先生どうぞ蒙古の人になって下さい」という心からの言葉や女生徒たちの「先生何年か後に、

又蒙古に来て下さい」という別れを惜しむ素朴な言葉に触れ、一二年間日本で新しい知識を吸収し、頭脳を一新させた後、再び蒙古に戻ろうと決心した。しかし、この決心はあくまで彼女個人の考えであり、将来のことは予期できないのである。これまで、蒙古の女子教育をなるべく日本流に発展させようと努力してきた彼女が、喀喇沁を離れようとした時、日本と蒙古の親善関係を維持し続ける良い方法は同地方の蒙古人生徒を日本に留学させることだと考えた。それで、王及び王妃の賛同を得て、女学堂から成績が優秀な少女を三名選抜し、帰国の際に伴わせた。

この三名の少女はそれぞれ金淑貞（13歳）、何蕙貞（15才）、于保貞（15歳）といい、いずれも王府重臣の娘であり、河原操子の毓正女学堂での教え子である。一度も故郷から離れたことがない彼女らが海



図IV. 2 三名の留学生と河原操子の記念写真

(出典:喀喇沁王府陳例室2008)

の彼方の日本に行くことは当時の内蒙古全域においても前例のないことである。彼女らの父兄らが大きい不安を抱いたことは容易に想像できるだろう。それにもかかわらず、旗民が娘たちを送り出したのは河原操子をすでに異邦人とは思わず、自分の味方であると信頼していたからであろう。

同年1月24日、河原操子が三名の少女を伴い、汽車で北京を旅立った。帰国の経路は北京→天津→秦皇島→芝罘→釜山→長崎であり、長崎に到着したのは2月7日となり、8日門司に入り、9日神戸に着き、10日午前東京新橋に到着、計17日間の日数がかかった。旅の道中で、河原操子が三名の少女に実母のように接し、船に酔っていないか、淋しくはないかなど細心の注意を払い、船の中では深夜三度も起きて、隣室の彼女らを見回るなどの心くばりで旅路を過ごしてきたのである。

東京に到着後、この三名の蒙古少女は実践女学校に留学させることになった。実践女学校は現在の実践女子学園の前身であり、学祖と呼ばれる下田歌子がヨーロッパ留学から帰国後の1899（明治32）年に開設した中流階級及び庶民の女子教育を

目示した学校であった。下田歌子が校長を務める1901（明治34）年に初めて清国からの女子留学生を受け入れて以来、留学部を開設し、清国女子速成科課程を設置し、大勢の清国女子留学生を受け入れたのである。アジア民族造形文化研究所の横田素子さんの論文「内蒙古喀喇沁右旗学堂生徒の日本留学」<sup>38</sup>に「毓正女学堂生徒らが留学した頃の該校は、女子留学生受け入れの中心校であった」という記載がある。また、実践女学校における三名の学習内容については、中国側の文史資料、当時の記事文献などの記録が少なくてなかなか入手できない。上記の論文によると、実践女学校で他の清国留学生がそれぞれ専攻科ごとに分けられているのに対し、喀喇沁右旗の女子留学生が「蒙古留学生三名」と記載されているのみで、専攻科が不明であるとされる。またこの三名の卒業関与内容を「実践女学校卒業名簿」から検索した結果をまとめた表によると、三名の中二人の于保貞と何蕙貞の卒業が確認でき、何蕙貞は造花専科第9回卒業生（明治44年3月）、于保貞は編物科第9回卒業生（明治44年3月）と記されており、それぞれの属する専科も確認できる。もう一人の金淑貞についての記録は『赤峰市文史资料选辑』第四辑（喀喇沁专辑）に収録された訥古单夫の「特睦格図——蒙文鉛印的開創者」<sup>39</sup>一文に次のような記述がある。

一九〇三年貢王自備資金，游历日本，考察政治，调查教育新法。归国后，于一九〇六年冬从本旗选送留日学生时，特睦格图入选，被派赴日本学军事，入东京振武学堂陆军士官科。毕业后，他立志学医，经贡王同意，又转入东京慈慧医科学学校学医。他在日本留学六年回国，成为蒙古族近代第一批留日学生之一（共八人，其中女生金淑贞，于一九一〇年同他结婚，她对特睦格图的事业，有莫大的帮助）。

上記によると、金淑貞が1906年実践女学校に入学して以来の足跡を探る記録が見当たらないが、少なくとも1910年ごろ帰国しており、また同年日本留学した特睦格図の妻となり、夫の事業を扶持していたことが確認できるのである。

于保貞については実践女学校を卒業後、ほぼ30年の歳月を経て再び日本に赴き、当時の恩師である河原操子との再会を喜んだとされる。これを『蒙古土産』<sup>40</sup>の余録に

于保貞女史は、三十五年前に、何蕙貞、金淑貞

と少女三人で、当時の河原操子先生に伴はれ、留学生として来朝、実践女学校に七年間学んだ人である。今は喀喇沁王府の崇正学校（生徒三百余名）に日本語担当の教師を勤め、男女児二人の母であるが、十四五歳の頃に若返えて、河原先生、河原先生と、いかにも懐かしげに呼びかけるは、何かしら聞く者の胸を打つ。

と記している。于保貞が実践女学校に入校したのは1906年であり、35年後の今とは1941年のことになる。これによると、彼女が実践女学校を卒業してから、故郷に帰り、喀喇沁王府の崇正学校に日本語担当の教師として1941年まで勤めていたことが確認できる。なお、もう一人の何恵貞については留学した後の履歴の確認は未だに困難である。

#### 四、河原操子の後を継いだ日本人教師

河原操子が帰国することになったのは1906（明治39）年1月であった。しかし、一から作り上げた毓正女学堂をそのまま気軽に手放していくのはどうしても耐え難かった。また、喀喇沁を離れた後、毓正女学堂がどうなってしまうのか気がかりでもあった。しかし、その後任者に推薦されたのは東京帝国大学の人類学・考古学・民族学の先駆者である鳥居龍藏博士と妻の鳥居きみ子の二人であったから安心する気持ちになったのである。

鳥居龍藏（1870—1953）は徳島県徳島市に生まれた。小学校を中退し、独学で人類学を学び、1892（明治25）年に一家をあげて東京に移住する。それから東京帝国大学人類学教室の標本整理をしながら勉学に励んだ。そして1895（明治28）年の遼東半島への調査をかわきりに、台湾・中国西南部・シベリア・千島列島・沖縄など東アジア各地を調査した。なかでも満州・蒙古の調査は鳥居と彼の家族のライフワークともいってよい程、家族をつれて度々調査に訪れている。妻のきみ子も鳥居龍藏の助手として働き、共に蒙古に入り蒙古の調査に同行したのである。

鳥居きみ子（1881—1959）は徳島市生まれで、徳島県尋常師範学校高等科、淑慎女学校を経て徳島県師範学校師範科を卒業した。その後、撫養尋常小学校の訓導として1年間勤務した後上京し、上野音楽学校に入学し、翌年1901（明治34）年に鳥居龍藏と結婚した。

『鳥居龍藏全集（第九巻）』によると、1906（明治39）年の2月ごろに喀喇沁王府より初代河原操子女史の後任として、なるべく夫婦がよいという

ことで正式招聘の話が来て、早速快諾した二人は故郷の徳島に帰り、長男の龍雄を実家の母と妹に預け、3月には先ず、きみ子夫人が一人で赴き、出迎えにきた貢桑諾爾布王と王妃は、ラバ轎の一行に加わり、北京を出発し、喀喇沁王府に到着したのは9日後であったとされる。研究中の仕事を抱えていた鳥居龍藏は1カ月後の4月に喀喇沁へ出発していた。

喀喇沁王府に到着後、鳥居龍藏が男子学堂（崇正学堂）に日本語を教え、鳥居きみ子が河原操子の後を継ぎ、毓正女学堂で日本語の教師として勤めた。教師といっても「児童の為に白墨を執りし経験無きが上、又元来教師たるを好まざれば、約束に随ひて教育の任には当たれるものゝ、寧ろ日語と蒙語との交換的教授なりしも、……妻と共に日々蒙古語の研究に従事し、また学堂にて教授する際も出来得る丈け蒙古語を以てすることとしたれば、蒙古語練習の機会多く、得る処多かりき。」<sup>41</sup>と記したように、鳥居龍藏が蒙古に来た目的は蒙古人に親しみ、文化的に彼らを教育するとともに、自分の専門とする人類学、考古学を研究するためでもあった。

なお、鳥居きみ子は毓正女学堂で蒙古女子の日本語教育に携わったが、河原操子を後継いたため教育において、学則も、教授科目も、園遊会もほとんどは河原操子のつくった方式そのままを踏襲したものであり、自分独自のものといえば、それは唱歌であり、東京上野音楽学校で学んだ技術を生かして、蒙古女子生徒たちの心を楽しませたようである。だから、一年間の喀喇沁在留を終え、帰国に当たり、二人の先生に対して、教え子たちの別れを惜しむ心には相当の差異があった。河原操子に対して女生徒たちは滂沱の涙を流したり、馬車の後を追って「先生」と呼びながら駆けたりした。また、彼女が帰着した後、女子生徒たちはたどたどしい日本語で綴った手紙を頻繁に彼女のもとに送っていたのである。一方、鳥居きみ子との別れにはそうでもなかったようである。上記の事情から鳥居きみ子の入蒙の本質は河原操子と違っており、夫の蒙古調査事業を支えることは女子教育の仕事より重要であった。彼女は喀喇沁王府に一年間留まり、1907（明治40）年一月に一時日本へ帰り、同年6月に再び喀喇沁に至り同12月まで蒙古語、其の他を研究しつつ王府に留まった。彼女は蒙古では鳥居龍藏の調査に同行し、『土俗学上より観たる蒙古』、『蒙古を再び探る』（龍藏と共著）を著し、女性人類学者として近年評価が高



まっている。

## V. 終わりに

本論文では、毓正女学堂の歴史意義と河原操子の教育上の貢献を貢桑諾爾布及び河原操子の活動を通して論じた。

貢桑諾爾布は近代教育史上の先駆者として、内蒙古地区で初めて近代教育制度を導入した三つの学堂を創り、教育により民族の振興を図った。この三つの学堂から卒業した蒙古族学生らが、後日、内蒙古の発展に重要な役割を果たした。

しかし、その中で毓正女学堂が、河原操子による日本人の出入りがあったため、この女学堂が当地を同化する日本の根拠地であったのではないかという疑問が持ち出されたが、当時の時代背景、女学堂の発展、女生徒の日本留学経緯などから毓正女学堂が日本の根拠地ではなく、その創設がかえって多くの知識と教養のある近代蒙古女子を輩出した事実は明らかである。その近代内蒙古女子教育における画期的な意義と歴史的地位は十分認められるべきものであろう。

彼女の本意は教育への熱烈な志であった。だからこそ、女子教育のために、横浜大同学校を始め、上海を経て喀喇沁まで辿り着いた。特に、彼女は喀喇沁では近代内蒙古女子教育の種を蒔いてくれたのである。

## 参考文献

- [1] 一宮操子（昭和19年）『蒙古土産』 靖文社
- [2] 河原操子（昭和44年）『カラチン王妃と私』 芙蓉書房
- [3] 河内美穂（2004年）『最後の蒙古浪人春日行雄』 リーブル
- [4] 黄文雄（2006年）『命がけの夢に生きた日本人』 青春出版社
- [5] 山崎朋子（1995年）『アジア女性交流史（明治・大正期篇）』 株式会社筑摩書房
- [6] 鳥居龍藏（昭和50年）『鳥居龍藏全集』（第九卷） 朝日新聞社
- [7] 福島貞子（昭和10年）『日露戦争秘史中の川原操子』 婦女新聞社
- [8] 保田與十郎（昭和45年）『日本の橋』 株式会社角川書店
- [9] 森久男（2000年）『徳王の研究』 創土社

## 中国語文献

- [10] 内蒙古社科院历史所编写组（1991年）《蒙

古族通史》 民族出版社

- [11] 内蒙古大学・中共内蒙古地区党史／内蒙古近代史研究所編（1992年）《内蒙古近代史译丛》（第三辑） 内蒙古大学出版社
- [12] 喀喇沁旗志編纂委員会（1998年）《喀喇沁旗志》 内蒙古人民出版社
- [13] 喀喇沁旗民族事務委員会編（2006年）《喀喇沁古今輯要》 喀喇沁旗CIVIL資料室
- [14] 政協喀喇沁旗委員会（2007年）《开明蒙古王一貢桑諾爾布》 喀喇沁旗文史資料第八輯
- [15] 赤峰蒙古史編委會編（1999年）《赤峰蒙古史》 内蒙古人民出版社
- [16] 中国人民政治协商会议内蒙古自治区委员会文史资料委员会（1988年）《内蒙古近现代王公录》（内蒙古文史資料第三十二輯） 内蒙古文史書店發行
- [17] 中国人民政治协商会议赤峰市委员会・文史资料研究会（1986年）《赤峰市文史资料选辑》 汉文版第四輯（喀喇沁專輯）
- [18] 中国人民政治协商会议内蒙古自治区委员会文史资料委员会編（1989年）《伪满兴安資料》（内蒙古文史資料第三十四輯） 内蒙古文史書店發行
- [19] 梅桑榆（2005年）《日本浪人禍華录》 中共党史出版社
- [20] 璩鑫圭 唐良炎（2007年）《中国近代教育史資料汇编学制演变》 上海教育出版社
- [21] 周一川（2007年）《近代中国女性日本留学史（1872—1945年）》 社会科学文献出版社
- [22] 曹永年主编 赵之恒本卷主編（2007年）《内蒙古通史・第三卷》 内蒙古大学出版社
- [23] 柴文举（2005年）《貢桑諾爾布史話》 喀喇沁蒙古文化研究会
- [24] 孙秀玲（2006年）《一口气读完大清史》 京华出版社
- [25] [美] 任达著 李仲贤译（2006年）《新革命与日本（中国，1898—1912年）》 江苏人民出版社
- [26] 王国军（2006年）《蒙古纪闻》 内蒙古人民出版社

## 注

注：「旗」とは、清朝のモンゴル支配構造の基礎となった単位である。清の太祖が1634年に内蒙古

を平定することとともに、まず、興安嶺東地方の蒙古諸部の遊牧地を割り付け「旗地」とし、その「旗長」には各部長や彼らと血縁関係にある貴族たちをそれぞれ分封し世襲させ、次々に広めていったものである。また、清朝は内モンゴルに対する主権を強化するために「旗」を統制する組織体として「盟」を組織し、清代を通じて内モンゴルには6盟49旗に区分されていたが、これらはそれぞれが一つの小王国のようなものである。

また、カラチン右旗は、盛京辺壁の西部より万里の長城の東部に至る線の直北に位置する卓索図盟に属し、赤峰口の東北55里にあるカラチン三旗の中の北に位置する。旗内の面積は、東西40里南北40里の躍、600平方里である。

- 1 横田素子「内モンゴル自治区右旗学堂生徒の日本留学」(『中日文化研究所所報』2005年第4号)に収録されている。
- 2 山崎朋子『アジア女性交流史(明治・大正期篇)』筑摩書房 1995年 79頁
- 3 多羅杜梭:多羅は満州語、賛美の言葉。爵位につけて使われる。例えば、多羅郡王、多羅貝勒、多羅格格(郡王および貝勒の娘らの呼称)など。杜梭は意味不詳。
- 4 古代、学生が先生と初対面の時に、必ず贈り物を捧げて敬意を表す。これを束修と呼ぶ。束修の礼儀は孔子の時代から始まり、唐の時代には盛んに採用され、学校の性質により贈り物の種類も異なる。先生がこの贈り物を受取る際に、必ず相応の礼儀をなす。
- 5 曹永年主編、趙之恒本巻主編《内モンゴル通史・第三巻》内蒙古大学出版社 2007年 430頁
- 6 貢桑諾爾布とはチベット語。完璧なペービという意味。
- 7 移民実辺とは内地から大量の人口を辺境に充実に、辺境地区の開発を強化するための人口移動を指す。移民実辺政策は秦の時代に遡る。この政策の実施は北方辺境の安全を保障できたうえ、この一帯の経済文化の発展を推し進め、国家の安定繁栄にも大事な役割を果たした。
- 8 《内モンゴル近現代王公録》内モンゴル文史史料第三十二輯 中国人民政治協商会議内モンゴル自治区委員会文史史料委員会編 内モンゴル文史書店発行 1988年 3頁
- 9 王国均《蒙古紀聞》 内蒙古人民出版社 2006年 52頁
- 10 蒙古を支配する野心を抱え続けてきたロシアは、外モンゴルの部分封建王公及び活仏を策動し、1912年12月1日「独立宣言」を発表し、活仏である哲布尊丹巴を皇帝(額真汗)に封ず、「大蒙古国」の成立を宣言した。
- 11 蒙蔵事務局は中華民国時期及び現今中国台湾地区の蒙古、西藏等地区の少数民族事務を管理する中央機関である。1912年7月成立され、1914年5月蒙西院と改組された。
- 12 《開明蒙古王一貢桑諾爾布》喀喇沁文史資料第八輯 喀喇沁旗志委員会 2007年 184頁
- 13 《開明蒙古王一貢桑諾爾布》喀喇沁文史資料第八輯 喀喇沁旗志委員会 2007年 237頁
- 14 《開明蒙古王一貢桑諾爾布》喀喇沁文史資料第八輯 喀喇沁旗志委員会 2007年 46頁
- 15 《赤峰市文史資料選輯》第四輯(喀喇沁專輯) 中国人民政治協商会議赤峰市委員会・文史資料研究会 1986年 3-4頁
- 16 王国均《蒙古紀聞》内蒙古人民出版社 2006年 84頁
- 17 横田素子の「喀喇沁旗学堂と日本人」(『中日文化研究所所報』2004年第3号 76-78頁)によると、寺田亀之助は陸軍中尉であり、日本軍事内命をおびて明治35年7月15日北京から蒙古へ出発し、蒙古における財政、兵事、教育、実業より風俗、人情などを視察して同年12月26日に帰着した。崇正学堂創設の年である1902(光緒28)年はちょうど彼の蒙古に向かったとされる時期であった。通訳であった小池万平に関する情報は未だに入手できず、今後も調査を引き続けていく所在であるとされている。
- 18 《開明蒙古王一貢桑諾爾布》喀喇沁文史資料第八輯 喀喇沁旗志委員会 2007年 78頁
- 19 《開明蒙古王一貢桑諾爾布》喀喇沁文史資料第八輯 喀喇沁旗志委員会 2007年 80頁
- 20 《赤峰市文史資料選輯》第四輯(喀喇沁專輯) 中国人民政治協商会議赤峰市委員会・文史資料研究会 1986年 18頁
- 21 《喀喇沁旗志》喀喇沁旗志編纂委員会編 内蒙古人民出版社 1998年 958頁
- 22 《赤峰市文史資料選輯》第四輯(喀喇沁專輯) 中国人民政治協商会議赤峰市委員会・文史資料研究会 1986年 19頁
- 23 吉田四郎は吉原四郎の間違ひではないかと考える。
- 24 一宮操子『蒙古土産』靖文社 昭和19年 153頁
- 25 瓊鑫圭 唐良炎《中国近代教育史史料汇编学制演变》上海教育出版社 2007年 310頁

- 26 一宮操子『蒙古土産』靖文社 昭和19年 172  
頁
- 27 戸口税とは一つ一つの家庭を単位にした納税  
方法を指す。
- 28 一宮操子『蒙古土産』靖文社 昭和19年  
161頁
- 29 一宮操子『蒙古土産』靖文社 昭和19年  
161頁
- 30 一宮操子『蒙古土産』靖文社 昭和19年  
188-195頁
- 31 山崎朋子『アジア女性交流史（明治大正期篇）』  
株式会社筑摩書房 1995年 73頁
- 32 璩鑫圭 唐良炎《中国近代教育史史料汇编学  
制演变》上海教育出版社 2007 205頁
- 33 山崎朋子『アジア女性交流史（明治大正期篇）』  
株式会社筑摩書房 1995年 79頁
- 34 山崎朋子『アジア女性交流史（明治大正期篇）』  
株式会社筑摩書房 1995年 80頁
- 35 《赤峰市文史资料选辑》第四辑（喀喇沁专辑）  
中国人民政治协商会议赤峰市委员会・文史资  
料研究会 1986年 18頁
- 36 一宮操子『蒙古土産』靖文社 昭和19年  
22頁
- 37 一宮操子『蒙古土産』靖文社 昭和19年  
44頁
- 38 横田素子は『中日文化研究所所報』に発表し  
た論文の中の二部は内蒙古喀喇沁右旗学堂に関  
する研究である。論文「内蒙古喀喇沁右旗学堂  
生徒の日本留学」は『中日文化研究所所報』  
2005年第4号に収録されている。
- 39 《赤峰市文史资料选辑》第四辑（喀喇沁专辑）  
中国人民政治协商会议赤峰市委员会・文史资  
料研究会 1986年 144頁
- 40 一宮操子『蒙古土産』靖文社 昭和19年  
259-260頁
- 41 鳥居龍藏『鳥居龍藏全集（第九卷）』朝日  
新聞社 昭和50年 12頁

